

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年): 医学部医学科・6年氏名: 野口 夏未

授業科目名	クリニカルクラークシップ
研修先(国・地域) 滞在地	インドネシア・セントラルジャワ・スマラン、ジェパラ、ディポネゴロ大学
研修期間	2017年4月10日～6月2日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>今回、脳神経外科のクリニカルクラークシッププログラムにて2ヶ月間インドネシアで貴重な体験をさせて頂きました。ディポネゴロ大学との交換留学のプログラムで、ディポネゴロ大学の生徒と共に2ヶ月間実習をしました。最初の2週間はERにて、主に外傷を見ました。生徒と共に夜勤の経験もしました。驚いたことは多くありますが、2点特に驚いたことがあります。1点は骨折、特に開放骨折の多さです。インドネシアではスクーターが移動方法の主流で街中を多く走っており、その事故が絶えない為でした。骨折の処置等に多く参加させて頂き、また縫合などもさせて頂きました。2点目は環境です。バイタルのモニターは2台のみで、最重症患者のみにしかつけられていない状況でした。ただただベットが大きい部屋に並べられているだけで、しきりもなく雑多な印象を受けました。付き添いのご家族は一晚中ベットサイドに立っていたのが印象的で、インドネシアの物資や人手の不足を感じました。次の2週間は脳神経外科にて主に手術に参加させて頂きました。毎回術野に参加させて頂くことができ、1日2件入らせてもらえたり、休日は違う病院の手術に連れられてもらえたり、とにかくたくさん手術を経験しました。インドネシアでは整形外科領域も脳神経外科で担っており、整形外科の手術も多く見ました。結核による膿瘍が椎骨に波及している例が印象的でした。次の2週間は神経内科にての実習でした。ここでも生徒と共に、バイタルチェックや神経診察を多く経験しました。モニターが無いので3時間毎にバイタルチェックをするのですが、その中で広範な脳梗塞で寝たきりの女性がいきなり瞳孔不同になり、その数時間後に死亡したのが忘れられません。瞳孔不同を確認した後医師を呼ぶと、その医師はすぐにご家族にもしもの際は救命措置を行うかどうか確認していたのも印象的で、瞳孔や対光反射の大切さを身をもって経験したエピソードでした。最後の2週間は引っ越しをして、田舎の小さな診療所にて公衆衛生を学びました。この実習は私が無理にお願いをして受け入れをもらったもので、ここでも生徒と共に動きました。デング熱に関する公衆衛生の調査に参加しました。デング熱患者の多い農村に出向き、デング熱の元となる蚊の幼虫がいらないか、水の入っているコンテナの個数とその中身について統計をとる調査でした。80家ほどを回りました。公衆衛生学ではどのように調査を行っているのか、都市部以外のインドネシアの村はどのような状況なのかをみることを目標にしていました。都市部から数十分車で走った場所にある村には電気も通っておらず、村民は土の上を裸足で歩き、トイレやお風呂が屋外にあったりする様子を見て、日本との違いを感じました。そして、その近くにある保健所がその保健所の区域の村にてデング熱の罹患率を大幅に減少させた話も聞きました。とにかくデング熱に関する知識を広め、蚊の幼虫を殺処分できる薬を配り歩き、使うことを人々に説得したと言います。公衆衛生の大切さ、感染症の怖さを知った二週間でした。そしてこの2ヶ月を通して、インドネシアでは病歴聴取と診察に重きを置いており、その教育がとても熱心なことを感じました。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>インドネシアの生徒達は日本とは比べられないほど多くの経験をしていました。研修医と同等といっても過言ではないほど、生徒同士で昼と夜の12時間交代でシフトを組み1日中病院で勉強し経験を積んでいました。そんな他国の医学生の姿を見て、自分ももっと頑張らなくてはと焦る気持ちで帰国しました。また、脳神経外科と神経内科での実習にて、神経診察に関してとても興味を持ちました。診察だけで分かることの多さと、その結果から推理する面白さに気づき、今後は症候や診察所見から患者の状況を推測する力を伸ばしていけたらと思っています。付け足しにはなりますが、英語の大切さを感じています。インドネシアの学生・医師は医学英語を当たり前のように知っています。今後は意識して医学英語を病名の単語から少しずつ勉強できたらと思っています。</p>	

(記入にあたっての注意)

この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細(複数頁可)に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。パソコンでの作成を原則とします。また、参加した研修がタイプA(地域貢献型)及びタイプBの場合は、地域貢献や地域活性化に資するグローバルな視点や能力を得たかどうか、成果を必ず記載してください。本報告書は、鹿大「進取の精神」支援基金HP及び報告書等に掲載されます。

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年): 医学部医学科・6年氏名: 野口 夏未

授業科目名	クリニカルクラークシップ
研修先(国・地域) 滞在地	アメリカ・フロリダ・マイアミ大学
研修期間	2017年6月12日～7月7日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>今回、クリニカルクラークシッププログラムにて1ヶ月間アメリカで貴重な体験をさせていただきました。移植外科での実習で、肝臓移植を専門とされている西田先生と移植外科の先生方にお世話になりました。術前カンファへの参加、外来見学、合併症及び死亡カンファへの参加、手術見学が主な実習内容でした。各カンファでは先生方の討論が白熱し、早い英語で聞き取るのに一生懸命でした。症例検討の方法や雰囲気は日本と変わらないように思いますが、若い先生が積極的に教授や上の先生に意見を言っているのが印象的で、自信を持って大きな声で発言する若い先生に感銘を受けました。外来見学は、日本と違い医師と看護師が部屋を移動する方法で、一人にかかる時間の長さに驚きました。そして、常に患者さんには付き添いの方がいらっしゃり、先生は患者さんご本人とも付き添いの方も丁寧にお話しをされていました。移植という特別な手術だからかもしれませんが、本当に時間をかけて丁寧に話を聞く先生方の姿に驚きました。そして国民性なのか、患者さんはとてもおしゃべりです。内容は病気に関することから世間話まで、診察室が静かになる瞬間はありません。先生方のお人柄有りきのことではあると思いますが、外来ってこんなに笑い声が響いて楽しいものだったかなと驚くばかりでした。手術は、腎移植のみしか見たことがなかったので興味深く見させていただきました。移植はドナーがいつ現れるかわからないので、当たり前ですが予定手術は無く土日昼夜問わず行われます。印象では夜に行われるオペが多かったように思います。徹夜で行われることも珍しく無く、先生方の気力と体力には尊敬するものがあります。そして、移植は移植後のフォローが最も大変のように思いました。ドナーとレシピエント、二人の患者さんの気持ちを背負って日々仕事に向かわれている先生方、その気持ちが先生方の丁寧な外来と手術に通じているのではないかなと感じた1ヶ月でした。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>アメリカで盛んに移植が行われている状況を見て、国民性を感じました。しかしなかなか脳死の概念が定着しない日本でも2010年に改正臓器移植法が施行されてから移植件数が上がってきています。これからは移植医にならずとも、全ての医師がレシピエントやドナーと関わる可能性が出てきます。その際、どのように臓器移植について話すのか、どのように移植後のレシピエントの遺族やドナーと関わるのか、常に考えておく必要があると思っています。倫理的にとっても繊細なトピックです。移植を全く知らないと自信を持って臓器移植についてレシピエントやドナーと向き合えないと思います。そのような点から今回移植外科で、ほんの少しの間でしたが、移植がどのように行われているか知れたことは今後の医師人生のためにとっても良い経験だったと思っています。</p>	

(記入にあたっての注意)

この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細(複数頁可)に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。パソコンでの作成を原則とします。また、参加した研修がタイプA(地域貢献型)及びタイプBの場合は、地域貢献や地域活性化に資するグローバルな視点や能力を得たかどうか、成果を必ず記載してください。本報告書は、鹿大「進取の精神」支援基金HP及び報告書等に掲載されます。

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年): 医学部医学科6年

氏名: 山本 道雄

授業科目名	選択実習
研修先(国・地域) 滞在地	アメリカテネシー州メンフィス St.jude children's research hospital(セントジュード小児研究病院)
研修期間	2017年3月18日 ~ 4月30日

〔研修を通じて得た成果〕

私が臨床実習を行ったSt.jude children's research hospitalは小児の致命的な疾患の治療と研究に特化した施設であり、臨床・研究ともに非常にレベルの高い施設であった。この施設は治療にかかる費用のほとんどをアメリカ国民の寄付でまかなっており、年間約800億円の寄付があるそうである。朝から昼過ぎまでは臨床のLeukemia/Lymphoma Serviceにて当直からの申し送り、カンファレンス、ラウンドに同行し、昼過ぎからは研究室にて患者検体を用いて行う研究の手伝い等をさせてもらった。この施設に入院している患者は、治療が全て無料であることもあり人種も地位も非常に多様であり、様々な価値観や宗教観を垣間見ることができた。治療は小児の急性リンパ球生白血病については治療成績は世界一であった(日本でのsurvival rateは90%に対し、この施設では96%と非常に高い)。治療には入院した患者全員の全ゲノムの情報を解析し、それを利用してSNPの有無や遺伝子変異の位置を正確に把握し、それにより薬剤の投与量を決定するという個人個人のゲノム情報に対応したオーダーメイドの医療がなされていた。さらに入院期間中日本では基本的に家族が病室には入れないが、この施設では病室がとて広く患者の家族が本人と一緒に生活することができ、家族と一緒に病氣と闘っているという体勢ができていた。研究面については患者の検体を使用して、個々の患者の白血病細胞に抗癌剤を投与し、薬の効きや反応生を見る薬剤感受性試験を中心として、抗癌剤の副作用をいかに軽減するか等患者検体を用いた多くのハイレベルの研究がなされていた。日本人の研究者も多く良い結果を出している先生もたくさんおられたので彼らと知り合えたこともとても貴重な機会となった。さらに私は個人的にとっても興味を持っている長期入院中の子ども達の教育についても見学させてもらった。St.judeには病院内に学校があり、そこでは一人一人のレベルに合わせた授業が行われていた。先生は全部で8人おり年間計250人の生徒に勉強を教えていた。科目もそれぞれ自由に選択できた学校やホームティーチャーと連絡を取りながら授業を進めており、日本では見れないシステムもありとても勉強になった。最後に、学生時代にこのような最先端の施設で研修を行える機会はあまりなく、研修に行かせてくれた先生方や大学にとっても感謝しています。ありがとうございました。

〔研修後の抱負〕

私は鹿児島大学に入学する前に研究歴があることから、研究と臨床の療法ができる小児科医を目指しており、学生時代にこのような施設を訪れそこで実習させていただいたことはとても良い経験となった。短い期間ではあったが、小児の白血病に関しては世界で最もレベルの高い医療を体験することができたと思う。現在この経験を生かして今後自分がどのような医療を実現して行くのかを深く考えさせられており、この施設で行った臨床実習はこれまでの人生で最も印象に残る経験となった。

(記入にあたっての注意)

この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細(複数頁可)に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。パソコンでの作成を原則とします。また、参加した研修がタイプA(地域貢献型)及びタイプBの場合は、地域貢献や地域活性化に資するグローバルな視点や能力を得たかどうか、成果を必ず記載してください。本報告書は、鹿大「進取の精神」支援基金HP及び報告書等に掲載されます。

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年): 医学科6年

氏名: 中林 舞

授業科目名	選択実習
研修先(国・地域) 滞在地	ドイツ・ハノーファー、国際神経科学研究所
研修期間	平成29年5月16日 ~ 6月21日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回私は、脳神経外科学講座の協力の下、ドイツ・ハノーファーにあるInternational Neuroscience Institute (以下INI)に4週間滞在させて頂いた。現地では、脳幹部腫瘍でご高名なProf. Bertalanffyにお世話になり、脳や脊椎外科の手術見学を行った。今回、海外での研修にあたり、①日本では体感できないレベルの医療を伝聞ではなく自分の目で見て実感すること、②自分が苦手とする英語を常に使う環境に身を置くことで少しでもスキルアップし将来に繋げること、を自分の中の軸とし、日本を出発した。</p> <p>INIで見た手術の数々は、難しい位置に発生している腫瘍であるにも関わらず、非常に手技が素早かつ確だった。「手術が巧い」ということが一体どのような結果を生み出すのか、ということをも日本にいた時には漠然と考えていたが、今回、その意味を深く噛みしめることとなった。つまり、素早かつ確に手術が遂行できるということは、その患者に対しては麻酔などの長時間の負担を軽減することにつながり、また医療スタッフは2日に複数件の手術を行うことを可能とする。ひいては多くの患者を救うことになるのだ。そして、その技術はもちろん2日にしてなるものではなく、日々繰り返し症例から解剖を学び、積み重ねた努力の先にある。今回それを直に目の当たりにしたことは、今後自分が医師として生活していく中で、大きなモチベーションに繋がると感じている。</p> <p>また、INIはドイツ国内外から患者が訪れる国際的なprivate hospitalであり、スタッフの国籍も多様であった。日本の医学教育は英語に触れる機会がかなり少なく、学生生活の中でも医学論文に触れることに対して抵抗のある同級生も多く散見してきた。しかし、国外の学会では英語での発表が必須であり、論文を書き上げようとするればそれも同様である。今回このような形ではあるが実際に日々英語で医療についてやりとりをする機会を持ったことで、飛躍的に自分の中での意識が高めることができた。</p> <p>〔研修後の抱負〕</p> <p>日本にいた時には血管治療ばかりに興味があったが、今回の経験を通じて全く興味のなかった良性腫瘍領域に挑戦したいと思うようになったことは予想外の産物だった。現段階では自分がどの分野・領域に進むかは全く決めていないが、将来的には何らかの形で外科領域に携わりたいと考えているので、今回の学びを常に思い出し、過ごしたい。また、言語の重要性を痛いほど痛感したので、より自分の将来の可能性を広げるためにも、意識的に触れていきたい。</p>	

(記入にあたっての注意)

この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細(複数頁可)に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。パソコンでの作成を原則とします。また、参加した研修がタイプA(地域貢献型)及びタイプBの場合は、地域貢献や地域活性化に資するグローバルな視点や能力を得たかどうか、成果を必ず記載してください。本報告書は、鹿大「進取の精神」支援基金HP及び報告書等に掲載されます。

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年): 医学部6年

氏名: 牧野 隆太郎

授業科目名	選択実習
研修先(国・地域) 滞在地	ドイツ・ハノーファー、International Neuroscience Institute(国際神経科学研究所)
研修期間	2017年 5月 17日 ~ 2017年 6月 17日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>研修先のInternational Neuroscience Instituteでは、脳幹部手術の権威であられるBertalanffy教授のもと、1ヶ月の間手術見学を行った。実習中は先進的な医学内容に加えて基本的な脳神経の解剖も深くご教授いただき、頭頸部領域の外科に関する理解が大変深まった。また、International Neuroscience Instituteにはドイツのみならず欧州の各地から患者が訪れ治療を受けており、多国籍の人々の中で病院実習を行うことで、今後ますますの国際化が進むと思われるわが国に対する考察を日々行うことができた。手術見学の内容については、脳幹部の海綿状血管腫が主であり、日本では一般的でない体位やアプローチでの手術についても学ぶことができた。現地には欧州各国の他に中国やカザフスタンからも脳神経外科医が研修に訪れており、彼らの国における一般的な術式についても質問することができた。本実習で最も多くみた「sitting position」での脳幹部手術は出血が重力で下に流れるため背臥位と比べ術野が綺麗であるという反面、空気塞栓により注意を払わなければいけない点があり、日本をはじめ他のアジア圏病院でも一般的ではないとのことであった。このように多国籍の医師集団の中で実習することにより、その手技や機材が世界基準なのか、そうではないのかが把握しやすいというメリットもあった。Bertalanffy教授は手術のみならず学術的な面でも精力的に活動されており、実習中は彼の執筆した海綿状血管腫に関する論文を読ませていただく機会もあった。論文抄読を多く経験することで研究に対する理解力が深まり、また将来の論文作成にも大きな助けになると感じた。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>医学部でのクリニカルクラークシップは本実習をもって終了したが、卒業後医師として働き続ける中でこの経験は大きな財産となった。特に、日々の臨床の中でも常にアカデミックな視点を持つ姿勢で取り組んでいきたいと思う。また、国際化の波に適応できるような個人的な技能や病院のシステムを考察し議論できるようにブラッシュアップしていきたいと考える。さらに、この経験を後輩たちに還元しより充実した実習を送れるようにサポートしていきたいと考える。</p>	

(記入にあたっての注意)

この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細(複数頁可)に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。パソコンでの作成を原則とします。また、参加した研修がタイプA(地域貢献型)及びタイプBの場合は、地域貢献や地域活性化に資するグローバルな視点や能力を得たかどうか、成果を必ず記載してください。本報告書は、鹿大「進取の精神」支援基金HP及び報告書等に掲載されます。

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年): 医学部医学科6年氏名: 岩田大輝

授業科目名	選択実習
研修先(国・地域) 滞在地	カナダ、トロント小児病院
研修期間	平成29年 4月 19日 ~ 平成29年 6月 30日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>カナダ・トロント大学医学部附属病院のひとつである、トロント小児病院(通称SickKids)において、約2か月間勉強する機会をいただきました。私が在籍したラボは小児神経部門の臨床神経生理学ラボで、長時間脳波モニタリングや脳磁図検査を行い、てんかんの手術適応や切除範囲を評価するラボでした。実習はトロント小児病院の週間スケジュールに沿って行われ、臨床研究への参加、カンファレンスやセミナーへの実習をさせていただきました。当ラボはトロント大学医学部小児科教授の大坪宏先生の下、様々な国籍の職員によって構成されており、カンファレンス等は全て英語で行われました。特に、週一回行われるseizure conferenceでは、様々な職種の人たちが一堂に会し、難治性てんかん患者の手術適応や病変の切除範囲などについて検討していました。そのような場では、世界最高峰の施設において人種や国籍の壁を越えて仕事をする際のツールとして、英語の重要性をまざまざと感じました。海外では、質問や意見があればどんどん発言し、自分の考えをはっきりと伝える人が多いと思います。若い人でも堂々と自分の意見を言う姿は見習うべき部分です。海外で彼らと肩を並べその上に行くには、英語の習得、特に相手の意見を聞き、自分の考えを述べるというリスニング&スピーキングの力が不可欠だと感じました。また、Research Fellowとして留学されている日本人医師のご指導の下、臨床研究を経験させていただけたことは大きな刺激となりました。日本の大学の实習では、病院のベッドサイド実習がほとんどで、臨床研究に参加できる機会はほとんどありません。しかし、医学の発展は臨床研究によってもたらされるものです。学生時代の今、臨床研究の世界を覗くことができ、医学の新しい側面と自分の将来の可能性について、新たな知見を得ることができました。研究内容としては、小児難治性てんかんにおける脳切除手術の術前評価の一つである脳磁図(MEG)を用いた新たな解析法について研究を行いました。研究したものは、英語論文として雑誌に投稿しました。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>トロントで勉強させていただく前は、目の前の患者を救う臨床医療と、医学の発展に寄与する研究は一人の医師が行う仕事として両立し得るものなのか、少し疑問を感じていました。しかし、深い臨床経験に基づいた研究で世界をリードしている現場を目の当たりにし、私もそのような貢献ができる医師になりたいと深く感銘を受けました。今後は国家試験に向けた学習が主となりますが、グローバルスタンダードな視野を持ち、今回必要性を痛感した英語学習も含め、研鑽を積んでまいりたいと思います。</p>	

(記入にあたっての注意)

この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細(複数頁可)に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。パソコンでの作成を原則とします。また、参加した研修がタイプA(地域貢献型)及びタイプBの場合は、地域貢献や地域活性化に資するグローバルな視点や能力を得たかどうか、成果を必ず記載してください。本報告書は、鹿大「進取の精神」支援基金HP及び報告書等に掲載されます。

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年): 医学部医学科6年

氏名: 原口めぐみ

授業科目名	クリニカルクラークシップ
研修先(国・地域) 滞在地	アメリカ合衆国、マイアミ大学
研修期間	2017/5/15～2017/7/7
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>アメリカ合衆国のフロリダ半島の南に位置するマイアミは鹿児島市の姉妹都市であり、アメリカにおける主要都市である。今回私は、マイアミにあるジャクソンメモリアルホスピタルで働かれている鹿児島大学出身の西田先生のご協力のもと、鹿児島はもとより日本ではなかなか見学出来る機会の少ない移植外科について学ぶ機会をいただいた。</p> <p>アメリカでは年間移植数が約25000件といわれ、それと比べて日本では年間約300件とされている。この数の差には日本とアメリカでの脳死に対する人々の考え方の違いが反映されている。アメリカでは脳死は人の死という考え方が日本より広く浸透しており、脳死後の臓器提供数が多い。日本でも、臓器移植法改定後、少しずつ脳死下での臓器提供が増えているといいつつも平成24年度は45件に留まっているのが現状である。</p> <p>ジャクソンメモリアルホスピタルでは、肝移植の権威である西田先生のご指導の下、肝移植前後の患者さんの外来見学や肝移植術、カンファレンスに参加させていただいた。そこでは多くの驚きがあったが、特に印象的だったのは提供臓器の振り分けの指針となるMELDスコアと脳死患者から臓器を取り出す手術である。MELDスコアは全て血液検査値から成り立ち、年齢や原疾患にとられない振り分け方法だ。たとえアルコール性でも自己免疫性でも、高齢者でも若者でも関係なく全身状態によって肝臓が振り分けられるのだ。外来で、アルコール性肝硬変が原疾患だった移植後の患者の肝酵素の数値が芳しくなく、先生が移植後も再びアルコールを摂取しているせいだろう、とおっしゃっていたのが胸に刺さった。そして、脳死患者からの臓器摘出手術では、看護師が開始前に祈りの言葉を唱え皆で黙祷した。それからはいつものように術式が進み。肝と腎の摘出が行われた。そこで命を繋ぐ感動を覚えたと共に、後半心臓を止める場面ではその、繋げる際の重みを感じたのだった。</p> <p>約2ヶ月という短い間の研修ではあったが、医学とそれを取り巻く文化や考え方の違いを多角的な視野から感じ取ることが出来た。このように貴重な体験をさせていただき、関わってくださった全ての方に感謝申し上げます。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>今回、日本を出て海外の病院で研修させていただいて初めて日本の病院や医療制度の良さに気付いたことがあった。一方で感じた日本の課題について自分なりに覚えておいて、それらを変えていける工夫はないか常に考えていきたいと思う。</p> <p>また、初めて海外で2ヶ月暮らし、そこで出会った仲間から刺激を貰ったのは大きな収穫である。国境を越えて共感したり違いを認めたりするなかで、高め合うことが出来たと思う。この経験を胸に、来年から社会に出て、自分の使命を全うしたい。</p>	

(記入にあたっての注意)

この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細(複数頁可)に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。パソコンでの作成を原則とします。また、参加した研修がタイプA(地域貢献型)及びタイプBの場合は、地域貢献や地域活性化に資するグローバルな視点や能力を得たかどうか、成果を必ず記載してください。本報告書は、鹿大「進取の精神」支援基金HP及び報告書等に掲載されます。

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年): 医学部医学科6年

氏名: 阪口 有里

授業科目名	選択実習
研修先(国・地域) 滞在地	アメリカ合衆国フロリダ州マイアミ・マイアミ大学
研修期間	2017/4/8~2017/6/9
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回私は、マイアミにあるJackson Memorial Hospitalの外科にて研修をさせていただきました。移植外科ではドナーのオペを見学したり、外傷センターでは搬送受け入れから患者さんについて検査を手伝ったりと、充実した研修をすることができました。研修を通して得たものは、自ら積極的に取り組む姿勢の重要性です。アメリカの医学生は日本の医学生よりも許可されている医療行為が多いことも1つの理由だと考えられますが、何事にも積極的に取り組む姿勢は見習うべきだと感じました。英語力の不足のせいで、日本人は静かになりがちですが、質問すれば教えてくれますし、その指導も熱心です。また、どこの診療科でも感じたことですが、いわゆる「偉い」立場の医師たちが全く偉そうにしておらず、若い医師からの意見を積極的に聞いたり、指導したりしてとても良い雰囲気だと思いました。それが顕著に表れるのはカンファレンスの時です。医師だけでなく、看護師、薬剤師、ソーシャルワーカーを含めたカンファレンスでは、全ての職種の人たちがとても積極的に意見を交わしあっていました。日本よりも看護師の知識レベルや地位が高いと特に感じました。そして、どんな時もユーモアのあるジョークを交わしながらカンファレンスが進むので毎日とても楽しく参加することができました。カンファレンスは日常会話よりも話すスピードが速く何と言っているのか理解できないこともありましたが、特にジョークで笑えないと悔しいので、多少分からなくなっても頑張って聞き続けるようにしていました。初めは多少辛く感じていましたが、このカンファレンスに参加することでリスニングの力が格段に上がったと思います。留学の途中で気づいたことは、きちんと「日本から短期間研修にきている」と言わなければ、マイアミに住んでいる日系の学生だと勘違いされてしまうことです。アメリカには多様な人種の人たちが暮らしており、アジア系の人々も例外ではありません。また、南米からの移民が多い地域でもあり、すべての人がきれいな英語を話すわけではありません。外部からの学生はできることが限られているため、事前に説明しておかなければならないと分かりました。顔や話し方で察してもらおうとははいけません。これは、人とコミュニケーションをとるあらゆる場面で当てはまることでした。自分が困っていたり、不快に思ったりしているときには、自分の言葉ですべて説明しなければなりません。我慢して自分が抗議しなかったせいで、相手に対して不機嫌になったり怒ったりすることは道理に合いません。また、あらゆる物事に対して自分の意見を常に聞かれるというのも、日本ではあまりない経験でした。自分の思考や感情を言葉で説明する練習を長年してこなかったため、毎回とても苦労しながら話していました。論理的に話す能力は言語に関わらず必要なので、これから向上させていこうと思います。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>研修で得た経験や知識はもちろん、世界中から勉強に来ている医学生や医師との出会いは、私の人生の財産となりました。競争の激しい世界で努力している人たちは想像以上にとてもたくさんいます。その仲間たちに恥じない様に、私も日本で努力していきたいと感じています。また、今回得た英語力を向上させ、医師となったときに日本語を話すことのできない患者さんに対応できるよう、勉強していきたいと考えています。このような貴重な経験を与えてくださったすべての人への感謝を忘れずに、精進して参ります。</p>	

(記入にあたっての注意)

この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細(複数頁可)に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。パソコンでの作成を原則とします。また、参加した研修がタイプA(地域貢献型)及びタイプBの場合は、地域貢献や地域活性化に資するグローバルな視点や能力を得たかどうか、成果を必ず記載してください。本報告書は、鹿大「進取の精神」支援基金HP及び報告書等に掲載されます。

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年): 医学部医学科6年

氏名: 寺田芳寛

授業科目名	選択実習
研修先(国・地域) 滞在地	アメリカ合衆国フロリダ州マイアミ大学移植外科
研修期間	2017年4月9日～7月7日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>2017年4月9日から同年7月7日まで、マイアミ大学移植外科にて、鹿児島大学旧第二外科西田聖剛先生のご指導のもと、6年時臨床実習をさせていただきました。私はこれまでに、それぞれ一週間という短期間ではあるが、インドネシア・フィリピン・シンガポールでの病院を見学したことがあり、それと同様にアメリカの医療を経験したいという思いが強くなり、今回マイアミ大学での臨床実習を希望した。また、マイアミ大学での実習科は移植外科であり、日本、特に鹿児島ではなかなか経験することの少ない、脳死移植を見学したいという思いも、今回研修をさせていただいた大きな理由である。実習自体の主な流れとしては、術前術後外来・術前術後カンファレンスの見学を行い、実際に西田先生について術野で手術の見学をさせていただくものだった。また、マイアミ大学医学部では不定期で研修医向けの講義を行っており、西田先生のご厚意でそちらの講義にも参加させていただいた。以下、それぞれで得たことについて書きたいと思う。</p> <p>(1)外来・カンファレンス 多くの患者がアルコール性肝炎、B型・C型ウイルス肝炎といった慢性疾患から肝不全・肝硬変と移行し最終的な治療法として肝臓移植を選択されていた。日本との違いとして、患者の発言が大いに尊重されている点を感じた。日本の外来では医師が、「何か質問はありますか?」といっても患者は(たとえ疑問があっても)質問しないことが多々あるが、マイアミ大学移植外科の患者および家族は治療方針・服薬について少しでも疑問があれば医師に意見を言う点が印象的であった。特に西田先生は、簡易な英語で重要点を何度も強調して患者に教育されており、患者も先生のことを信頼しているように感じた。同様にカンファレンスでも上級医・若手医師の垣根なく自由に発言できる空気が構築されていたことが印象的だった。</p> <p>(2)手術 手術に関しては、周囲の病院で出た脳死患者(ドナー)から臓器を摘出し、マイアミ大学に持ち帰りレシピエントの移植するという流れを複数回経験させていただいた。もっとも印象に残っているのが、実際に臓器、特に心臓を取り出す瞬間であった。それまで拍動していた心臓から血液を抜いて灌流液に置き換えるまでほんのわずかな間であり、いまだに「心臓が止まる=死」という意識をぬぐえない私にとって非常に印象的であった。心臓を取り出してからは時間の勝負であり、言葉は少し悪いかもしれないがまるでハイエナのようにドナーから臓器を取り出していく先生方の姿も心に残っている。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>私自身は将来、外科系ではなく内科系に進もうと考えているが、今回マイアミ大学で研修させていただき、脳死の定義も含め日本の枠にとらわれない考え方にふれることができ、指導医の西田先生がおっしゃっていた、自分を高めるには、常に今の状況の中で何をすれば上を目指せるのかを考えなさいという言葉に心に留めながら与えられた場所で自分の最高の働きをしたいと考えている。また、少し具体的な話にはなるが将来医局に入局したあとに留学という形で海外の医療に触れることのできる機会があり、それを活かしてさらに自分を高めたいと思うようになった。</p>	

(記入にあたっての注意)

この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細(複数頁可)に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。パソコンでの作成を原則とします。また、参加した研修がタイプA(地域貢献型)及びタイプBの場合は、地域貢献や地域活性化に資するグローバルな視点や能力を得たかどうか、成果を必ず記載してください。本報告書は、鹿大「進取の精神」支援基金HP及び報告書等に掲載されます。

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年): 医学部6年

氏名: 水田 善之

授業科目名	選択実習
研修先(国・地域) 滞在地	アメリカ合衆国・マイアミ マイアミ大学
研修期間	2017/03/11 ~ 2017/05/14
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回の研修を通して、海外の医学生意識の高さと臨床能力の高さ、アメリカの医療の質、英語力の必要性、日本との文化などを学習することができたと思います。まずマイアミ大学の医学生についてですが、僕が実習を共にさせて頂いたのは医学部3年生で、3年生は基礎医学と臨床医学を一通り学び終えて初めて臨床の現場に立たせてもらえる、日本でいう医に相当する学年なのですが、彼らの病棟内での行動は学生とは到底思えない様な実習ぶりでした。彼らはチームの一員朝5時には病院に来て、当科の入院患者や外来患者のカルテを書き込んでいます。そして朝カンファでは、その学生が記カルテが全て印刷され、当科のドクター・ナース皆に配布されて、それを参考にカンファレンスが始まります。そして、カンファレンスが終われば、回診があります。回診の時には上級医の方同士で話すことが多いですが、時々学生もその会話に積極的に参加することもありました。そしてそれが終わると自分の指導医について、画像のオーダーであったり、検査したりと、日本に比べて多くのことを任されていました。時間があれば指導医と一人の患者について、治療法についてや病態について議論をするたくさんあり、単なる知識だけでなくどのように考えるのかをトレーニングされていました。そして彼らは病院内に当直して実習することもありました。そういった彼らの気力と臨床能力の高さ、医学教育の質などを身を以て体験して自分の医療に対する未だ切実に実感し、大変刺激を受けました。次には英語力についてです。マイアミ大学には日本以外にもたくさんの国から学生が来ています。彼らにとって英語は日本と同じ外国語で、学校で学習する言語なのですが、多くの日本学生とは異なり、英語を聞くことに何の問題も無い程に話すことができます。特別に自分で勉強したのかと彼らに聞いて、学校で習っただけでは英語を習わないのかと恥ずかしい思いをしたことを覚えています。それでも何とかしてコミュニケーションを取り、結果として友人を作ることができ、時間を見つけて夜飲みに行ったりと、とても充実した実習をさせて頂けたと思います。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>アメリカの学生を見て、実臨床に応用できる学習をすることと、英語の論文を読む習慣をつけることの必要性を感じました。働きぶりに負けないくらい頑張らなければ、ますます差が開いてしまう一方だと思います。このかけがえのない経験を生かして立派な医師になれるように、日々精進していきたいと思っています。</p>	

(記入にあたっての注意)

この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細(複数頁可)に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。パソコンでの作成を原則とします。また、参加した研修がタイプA(地域貢献型)及びタイプBの場合は、地域貢献や地域活性化に資するグローバルな視点や能力を得たかどうか、成果を必ず記載してください。本報告書は、鹿大「進取の精神」支援基金HP及び報告書等に掲載されます。

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年): 医学部医学科6年

氏名: 平井有紀

授業科目名	選択実習
研修先(国・地域) 滞在地	アメリカ・フロリダ、マイアミ大学
研修期間	2017年 5月 13日 ~ 2017年 7月 3日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>日本ではあまり見ることのできない移植外科の見学をすることができました。脳死ドナーからの臓器摘出の見学はとても貴重な体験でした。まず、印象的だったのが、手術開始前にお祈りをする事でした。この患者さんの命を救うための手術ではないのだと改めて実感し、ドナーの命の尊厳さに思い至りました。</p> <p>またアメリカでは臓器移植の優先順位の判定は疾患の重症度のみだと聞いて驚きました。みな平等の命ではありますが、ある程度の条件も必要なのではないかと思いました。実際にアルコール性の肝障害で肝移植をしたのにもかかわらず、数年後にはまたアルコールにより肝機能が悪くなっている患者さんがおり、やるせない気持ちになりました。</p> <p>アメリカの医療で日本よりも優れているなど思った点は、一人ひとりの外来にとっても時間をかけ、さらに医師と患者との距離感が近いということでした。いい意味で友達のような距離感で接しているのが印象的でした。担当医は終始和やかな雰囲気、患者さんや家族も疑問に思ったことは何でも聞ける様子でした。日本での外来にはこのような雰囲気はないので素晴らしいなと思いました。日本で外来に1人30分かけるのは難しいですが、雰囲気作りは参考にしたいと思いました。</p> <p>さらに日本の医療の受け入れ体制と違う点は言語が一つではない事です。英語での会話が出来ずにスペイン語だけでしか意思疎通ができない患者さんが大勢いました。そういった場合はスペイン語のできる医師が対応していましたが、これは日本では殆ど見られない状況ですが、今後日本もグローバル化されていけばこういう状況も起こりうるのではと、将来の医療課題の一つになるのではないのだろうかと思いました。</p> <p>医療を維持するもう一つの力となる看護師に関しては、アメリカの看護師達は主体性があり、知識や技術も大変優れており、医師と同じ立場で患者と一緒に治療している印象を持ちました。チーム医療とはこういうことなんだと感じることが出来ました。</p> <p>日本では経験できないことをたくさん経験し、さまざまな国の医師や医学生と関わることで自分の視野がかなり広がりました。この海外実習でアメリカの医療の優れた点を学ぶと同時に日本の医療の優れた点も改めて発見することが出来ました。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>日本だけでなく、さまざまな国の医療や技術を学び、広い視野で医療に携わっていきたい。</p> <p>今回の研修で語学力やコミュニケーション能力の重要性に改めて気づかされたので、さらに勉強に励みたいと思った。そして医師になってからも留学し、日本だけでは学べない知識や技術、医療スタッフや菅さんとの関わり合い方など学び、海外の医療優れた点を日本の医療に取り入れ、日本の医療の発展に貢献したいと思う。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年): 医学部6年

氏名: 川原 裕史

授業科目名	選択実習
研修先(国・地域) 滞在地	アメリカ合衆国マサチューセッツ州 Massachusetts General Hospital
研修期間	2017年5月3日 ~ 2017年6月26日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回マサチューセッツ州総合病院では、週4回の生化学の研究、週1回の麻酔科の講義と手術見学を主に実習として行いました。研究においては、先生方の研究プロジェクトの中で必要になる実験について教えていただきながらまたその手技を習得することができました。鹿児島大学では経験できなかった実験操作について触れることができたのは大変貴重な経験となりました。臨床においてはこちらのハーバード大学麻酔科教授の市瀬先生について、手術時の麻酔導入、手術見学を行いました。教授の専門が心臓麻酔領域ということもあり、心臓血管外科の手術を見学することができました。それに際し、経食道心臓エコーについても市瀬先生以外のこちらの麻酔科のドクターに教えていただくことができました。症例については日本ではなかなか経験できないような症例も見ることができました。加えて、アメリカの手術室の雰囲気や、その手術後の管理の様子もみることができました。日本とは違ったシステムで運営されていてその差、違いを自分の目で見ることはいい経験になりました。また、レクチャーに関してはマサチューセッツ州総合病院に各州のMD,PhDの先生方をお招きして、その先生方の麻酔科領域の臨床研究について講演をきくことができました。ポリクリ、クリクラでそのようなお話を聞く機会がなかったので、とても新鮮に感じました。やはり麻酔科領域とあって周術期管理に関する話題が多いように感じました。何をどのようにしたらどういう合併症リスクを下げることができるのか？一番術後管理が大変なのはこういった手術なのか？これらは一部に過ぎませんが、大変おもしろく興味深いお話を聞くことができました。そして、こちらで研究していらっしゃるラボの先生方から留学に関するお話も聞くことができました。いいこと悪いことも含め実際に活躍していらっしゃる各大学からの先生の生の声を聴くことができたのは、良かったです。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>大変貴重で刺激的なことばかりでした。実習もそうですが、約2ヶ月の間、1人で異国の地で生活するというのも良い経験となりました。まずは、国家試験に合格し医者としてのスタートラインに立たなくてはならないと思います。そして、初期研修を終えて入局することになれば海外研修のお話をいただくことがあると思います。その際に、今回体験したことがプラスに働くように、今回の実習を忘れず大事にし、これからの勉強を頑張っていこうと思います。</p>	

(記入にあたっての注意)

この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細(複数頁可)に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。パソコンでの作成を原則とします。また、参加した研修がタイプA(地域貢献型)及びタイプBの場合は、地域貢献や地域活性化に資するグローバルな視点や能力を得たかどうか、成果を必ず記載してください。本報告書は、鹿大「進取の精神」支援基金HP及び報告書等に掲載されます。

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年): 医学部医学科6年氏名: 早川 茜

授業科目名	選択実習
研修先(国・地域) 滞在地	アメリカ、デトロイト、ウェイン州立大学(ミシガン小児病院)
研修期間	2017年4月15日 ~ 6月25日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>米国デトロイトの小児病院にて約二ヶ月間、実習の機会をいただき海外研修に行ってきました。実習先のミシガン小児病院では主に脳神経外科・神経内科の領域にて研究に携わりました。この病院では、多くてんかんの子供たちが治療を受けに来ております。そういった患者さんの中には、薬のみでは治療ができず、脳を手術する場合があります。手術治療の過程で脳波を直接、脳の表面から測定することがあります。実習先の研究では、こういった難治性てんかん患者さんに協力いただき、測定した脳波を解析して研究を行っていました。今回は光を見せたときに、脳のどの部分が活性化されるのか或いは抑制されるのかということ調べておりました。私たち学生は集めた脳波のデータを加工、分析するというを行いました。その中で、てんかんについて理解を深め、脳波の見方を学ぶことができました。また、医学部の実習では触れる機会のあまりないプログラミングなども勉強することができ、視野が広がったように思います。また、毎週のカンファレンスにも参加させていただきました。カンファレンスでは、脳神経外科、神経内科の医師だけでなく、臨床心理士、放射線科医師、看護師、言語聴覚士、栄養士など色々な職種のスぺシャリストが集まって合同で患者の治療方針などを話し合っていました。日本でも、多職種の合同カンファレンスはあると思いますが、大学の实習で見たものよりも、多くの方が集まっているように感じましたし、より活発に意見が交わされているようでした。また、実習中、日本にはない医師と看護師の間のような医療職があることや、採血に特化した技師、診療科に特化した看護師がいることを知りました。また、折を触れて、実習先の先生から、人種による職業の格差が依然として存在すること、黒人の多いデトロイトでは特によくわかると教えていただきました。教えていただいた後に、気をつけて観察してみると、医師では白人やアジア人がほとんどだったり、逆にレジや受付係で働く人はほぼ黒人だということに気がきました。知識として人種間の経済的格差などがあることを知っていましたが、今回直に見たことで、改めて日本との違いを認識することができました。今回の実習では、医学に関する知識を深めることのみならず、日本と米国での医療の行い方の違いや、米国の文化や実情について知ることができ、とても有意義なものであったと思います。</p>	
<p>今回の実習で研究した成果をポスタープレゼンテーションにまとめました。これを米国の学会にて発表する予定となっております。自分にとっては初めての学会となりますし、貴重な経験になるものと思います。短い期間ではありますが、今回、米国の病院で実習した経験を、医師となって働いていく際に生かしていきたいと思っています。</p>	

(記入にあたっての注意)

この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細(複数頁可)に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。パソコンでの作成を原則とします。また、参加した研修がタイプA(地域貢献型)及びタイプBの場合は、地域貢献や地域活性化に資するグローバルな視点や能力を得たかどうか、成果を必ず記載してください。本報告書は、鹿大「進取の精神」支援基金HP及び報告書等に掲載されます。